

第三章 素顔



1 遅咲きの才能

鈍才から秀才組へ

京都帝大を卒業してすぐ母校の講師、翌年には助教授に就き俊秀の誉れの高かった先生ではあるが、幼時を振りかえって『私は神童、秀才ではなかった』と言っている。母校済々黌のもとめで、卒業して30年経った夜久野時代に思い出の記を後輩のために執筆しているが、それによると『中学入学試験を受けて失敗した。碩臺校(小学校)の同窓会に出ると、同級生だった連中が真新しい黄筋の帽子をかぶっている。それに発奮』して、こんどは受験勉強し合格、入学したが、成績は低迷。二年生のときは、ビリから二番目、及落の境界線をうろつくありさま。

当時の授業時の席は、成績の悪い方から順に、前から後ろへ並んで行くことになっていた。先生の前方の席には、一年上から落ちて来た原級止ま

りの生徒がいるだけ。名物費長の井芹経平は、学校の成績はそれほど重要視しなくてもよろしい、人格を磨け、と言い続ける教育方針であった。だから、なかには、各学年とも一年ずつ余分に勉強して十年近くかかって卒業する豪傑もいる済々黌であった。

先生はその後、徐々に成績を上げた。前から後ろへ席を移って行き、卒業時には最後列の壁付かべつきという名誉の席を占めた。晩年になって『40何人の級友たちのすべてと、席を同じくする機会があったのは、吾輩ぐらい。鈍才も秀才も、普通列車も、みんな仲良しだ』と楽しそうに語っている。

原級止め置き組のなかから後年の立派な実業家や名医が出た。逆に神童と言われ首席の座を譲らず官界に入った特待生が、深酒におぼれて頂上に行きつけなかったり。子供のころの成績が、その後の人生を決めるものではないということを身に



長男誕生。縁側でくつろぐ休日の先生夫妻(左から京子、長男雄豪、俊馬。大正末頃)

しみた先生の5年間であった。

『濟々費百年史』にも先生の思い出の記が掲載されている。クラスの席順としてはまだ留年組のすぐ後ろに座っていたころの話らしい。『文学青年で新派の和歌が上手だった石橋保さんの如きも、二年の時に私のすぐ前の最前列を占めた一人(つまり留年組)であった。昭和の初めごろであったろうか。ある秋の夕方、京都で大学からの帰途、前方十四、五間も先から「おい、荒木、荒木」と大声で叫びながら自転車を飛ばしてやって来た男があった。それが卒業後、はじめて遇った保さんだった。彼は自転車からとびおりるなり「ぬしゃ偉か人間になったなあ。ぬしゃ、先生よりも数学の上手だったけん。やっぱ今でん、あぎゃん難しか幾何ばしととつか?」これが十五年ぶりに奇遇した彼の最初のあいさつであったのだ。…私はむりやりに二階借りの彼の住まいに連れて行かれ、狐井かなんかをおごってもらって一晩話したことがあった。中学時代の友達というものは、言い知れず懐かしいものである。』

昭和の初年ごろ、というのは先生の思い違い。大正14年6月12日付、俊馬日記は「(大学から帰宅の途中)出町橋の上で石橋の保さんに会う。中学時代の友達が一番、親しみがあるようである」と短く記している。先生は、熊本に帰ると、濟々費時代の友人と違い、懐旧談に興じたのであった。とくに、京都産業大学の建学を前にして多忙を極めたときにも、しばしば熊本を訪れている。苦闘の続くなか、心の安らぎをもとめての帰郷であったのかも知れない。

父と子

先生の長男である荒木雄豪は、京都産業大学に創設時から勤め、理学部教授、計算機センター室長、図書館長を経て定年退職し、平成13年11月現在は名誉教授。先生と同じ京都大学宇宙物理学教室で学んだ。昭和20年の入学で、父に直接に授業を受けた期間は3カ月そこそこであったが、先生の素顔を語ることのできる数少ない人物である。しかし、「おやじから“お前はオレの悪い所がそっくりそのまま”と言われて来た。だから、おやじについて話すのは自分のことをさらけ出すような気がする、それはとても恥ずかしい」と言って思い出話を拒むのである。

一心同体。たしかに京都産大創設に最も早い段階からかわり、創設者の悩みを抱える先生を支えた建学の功労者のひとりであることには、誰も異存がないであろう。世界水準の馬術家でもある雄豪の生い立ちを追っていくと、俊馬先生の温かな家庭、すばらしい家庭人としての濃やかな情愛が浮かび上がってくる。そしてまた、京都産大の教職員、学生に向けられた愛情は、雄豪に対する愛情と同質であった。雄豪の人生を知ることは創設者の心の奥をのぞくことになる。

大正14年3月、おひな祭りの3日、先生の妻、京子はお産のために入院、19日深夜になって、陣痛が始まった。京子の父であり、先生にとっては義父であり恩師でもある新城新蔵博士も初孫誕生とあって駆けつけた。分娩室の前の冷え冷えとした廊下でふたりは母子の健康をひたすら願いなが



長男の雄豪に宛て、先生は片仮名の便りをおくった

ら産ぶ声を待っていた。午後11時を過ぎた。出入りする産婆さんの話では、あとほんの少し、だという。

先生にはひとつの期待があった。一刻も早くわが子をみたい。その一方で、もうちょっと誕生があとに延びてほしい。俊馬先生の誕生日である3月20日。しかもそれは春分の日なのであるが、重なったら、なんとうれしいことか、と考えていたのである。

『あす20日は吾輩の誕生日である。この時計が12時を打たない前に生まれたらどうしよう。親子全く誕生の月も日も同一であるということは偶然の暗合ではあるが、何か非常に壮嚴のこのように考えられるではないか。少なくとも非常に景氣のよいことである。吾輩は9カ月だったのに、春分の日をみはからって非常に早く母の胎内を飛び出したのであった。わが子は逆に14、5日も余分に胎内にあって、この日を待っていて、親と一緒に春分の日誕生しようと努力しているではないか。これを奇蹟といわずに何といおうか。19日の午後11時50分に生まれたらどうしよう。3月20日誕生で届けるか。しかしそれは偽りになってしまう(俊馬日記から)。義父の新城博士と共に時計の針をにらみながら、あれこれと考えて、長々と日記に綴っている。

『男児なら名前は決めてある。女の子だったら名前をこれから考えなくてはならない。ああ、ついに吾人は聞いた。勇敢なる生児の第一声を聞いたのである。それは真に、誠に勇敢なる第一声で

あった。男児に違いない。大正14年3月20日午前0時3分30秒である』

3,800gの男児誕生。妻も男もともに非常に元気。心労のあとの安堵感、疲れ切った先生は午前3時、いったん自宅へ向かう。鴨川の流に沿い出町柳へ向かって歩く。星の瞬きが美しい。腹の空いていることによく気づいた。おでん屋に入ると、もう火を落としている。近くに屋台があった。熱カンをいっぱいひっかけて、塔之段の自宅にたどりつく。

名前は「雄豪(ゆうこう)」と決めた。文豪のビクトル・ユゴーから名前をいただいた、と言ってもよいのだが、実はドイツの天文学者ユゴー・フォン・ゼーリガーの名にあやかっただけである。名前の由来を考えたりして、わが子誕生の興奮でほとんど寝ていなかった先生は、夜明けを待ってモーニングを着込み、病院へ出掛けた。父子の初対面は厳肅なものである、と考えたからである。

先生の若い父としての生活が始まった。天才肌の新進天文学者として地位も安定して来ている。順風満帆の日々。だが、先生の眼は、そうした安穩の日々の向こうから射す光に向けられていた。

『人生五十年と言う。しかし五十まで生きてただけでは足りないようだ。高山樗牛のような才人はいざ知らず、普通の人間が少しく大きな仕事をなすには八十位まで生きなくてはダメだ。過去三十年近くの際は、ただ学習のために費やされて仕舞った。仕事はこれからである。五十年の間、これから生きていて、その間、自分のやっているような方面の仕事を五十年一日の如く続けるならば、そこにながしか、日本の文明に貢献することができようではないか。また世界の文明にも貢献することが出来ようではないか。

六十にして定年である。あとの二十年を著述にでも費やすならば素敵だ。そういう虫のよいことを考えている。

そのためには、健康が大切である。いかにして身体と脳髓の健康とを保つことができるか。規則的生活は最も重要視すべき問題ではあるまいか。往々にして青年は規則的な生活について無頓着である。余自身の生活をひるがえって痛切に感ずる』(大正14.6.3)

この日記のとおり、先生はほぼ80年の人生を送った。しかし人生の終着駅までの20年間は希望どおりにはいかなかった。著述どころではなかった。京都産業大学創設という大事業に挑んだからである。疾風怒濤のなかで新設大学の創設者として、難しい舵取りをしなくてはならなかった。



わが子は同じ誕生日。その産ぶ声を聞いた感激の思いを記した俊馬日記(大正14年3月)

2 芸術に親しむ

オペラに魅せられて

ヨーロッパは、音楽の本場である。昭和初年の日本では、西欧の一流の音楽演奏に接する機会は、それほど多くなかった。しかし、文部省派遣の在外研究員として先生はいま、ベルリンにいる。

ここヨーロッパの国々の音楽にかかる意気込みは並々でない。ウィーン国立オペラの予算は、オーストリアの外交予算よりも多額だといわれたお国柄である。そうした世界屈指の劇場で夢にまでみた高名な音楽家の妙なる音楽を聴くことができる。本格的なオペラ、それは音楽と言葉、ドラマと美術を含む総合芸術であり音の芸術の極致であるが、それを毎晩でも鑑賞できる。胸は高鳴った。

『伯林(ベルリン)は、いまや音楽とオペラのシーズンに入った。伯林のオペラは魅力的だ』。昭和5(1930)年2月、京都の妻京子に宛てた便りを、先生はこう切り出している。

オペラは、夏は公演しない。冬、それも2月ごろがオペラの季節。便りによると、先生はヨーロッパ入りしてから短時日であるのに、その時までにはオペラを12回も観劇していた。ウンテル・デン・リンデンの国立歌劇場でワグナーの「さまよえる(天翔ける)オランダ人」を観た。ステーチッシェ・オーバーでチャイコフスキーの「ピグダグメ」に酔った。オペラ「マスケンバル」「フェドラ」などの感想が楽しそうに綴られている。オペラは「見る」schauen といわず「聴く」hören するものなどと京子に解説している。

『まだ、通^{つう}というまでには行かないけれども、少しは話ができるようになった。この次から少しオペラの物語でも書くことにしよう』(昭和5年2月3日付)。京子宛ての便りはいつとき先生のオペラの感想記に占拠される。まずワグナーの歌劇「マイスター・ジンガー・フォン・ニュルンベルクの話」を取り上げている。登場人物と劇のなかの場所、時代について説明したあと『マイスター・ジ

ンガーは歌の名手という意味。伝説に残る淋しいマイスター・ジンガーのハンス・ザックス(主人公の名前)についての16世紀ごろの物語である』と解説して第1幕、第2幕、第3幕の粗筋を記している。なんと葉書16枚が、小さな文字でびっしり埋まっている。オペラの殿堂に、妻を連れて行きたい。しかし、それはかなわないのであるから、せめて一緒に観劇している思いを妻に味わってほしい。そんな先生の心が、このオペラを紹介した葉書の行間に込められているようである。

先生は自分の「聴いた」ワグナーのマイスター・ジンガーが5時間にわたっていること、多重唱が多く、地方的な色彩に富むこと、こっけいな場面がちりばめられていることなどの特徴を挙げたあと『ワグナーのオペラは一般にそうであるが、このマイスター・ジンガーはドイツ以外では見ようとしても見れまい』と、本場のオペラに接し得た喜びを伝えている。

音楽は理性とは別の世界である。音楽は、感情を観客に直接にぶつけ、訴える。理性の世界に学ぶ先生にとっては、それが尽きない魅力の源泉であったのかも知れない。

妻に本場の歌劇の雰囲気伝えたい。そんな思いで便りを出したものの、専門の研究も忙しい。『この次から少しオペラの物語(オペラ台本)でも書くことにしよう』という先生の希望がかなえられたのは、夜久野の晴耕雨読時代のこと、つまり20年後であった。

「ワーグネル(ワグナー)天翔けるオランダ人 荒木杜司馬訳」は、400字詰原稿用紙83枚の歌劇台本である。ベルリン時代のメモを参考にしながら執筆したようである。いろいろなジャンルで執筆した先生ではあったが、歌劇台本としては、唯一のものである。草稿に先生の朱筆がかなり入っていることから、後日、出版するつもりであったと想像されるが、その後の著作集にも収められ



絵画は、自然科学の観察力を培う。そう喝破した先生は雪舟の絵を模写して彩管の技を磨いた(昭和30年代。61・65頁までの絵巻物)



これは珍しい先生のオペラ台本の草稿

ていない。先生の音楽に対する思いを知るうえで貴重な資料である。この台本は、ハインリッヒ・ハイネの「フォン・シュナーベレヴォブスキー氏見聞録(回顧録)」のなかの一篇を、先生が翻訳したものであり『本書は実際に上演するに当り、このままでも歌えるようにということに重点を置いた』と序文にある。

この台本に書かれている説明によると、物語は「決して港へ着けず、想像もつかないほどの昔から海を巡り続けている呪われた船と、そのオランダ人船長」をテーマに展開される。審判の日まで果てしなく航海するオランダ人船長が救われるのは、彼に貞節を尽くす女性に巡り会ったときだけである。七年に一度、船長は新しい女性と出会い、そのたびに結局は裏切られて行く。やがてノルウェーの船乗りダーラントの娘ゼンタと親しくなる。彼女は家に伝わる肖像画の船長が目の前に現われたことに運命を感じとり貞操を誓う。彼女を破滅させまいと、立ち去ろうとする船長。「死に至るまで貞節を」そう叫んでゼンタは海中に身を投じる。そのとき、悪魔の呪いは解けて、呪われた船は崩壊し、遙かな海上から、ほのぼのと明け

て行く紅の光に照らされて、オランダ人船長とゼンタが相擁して昇天する 筋書き。「呪われてさまようオランダ人が女性の貞節によって救済される」というモチーフは、ハイネが取り上げて(1834年)ワグナーがオペラの題材として選んだものであった、と記されている。

先生の解説によると、このワグナーの指折りの歌劇は、ショーペンハウエルの哲学を芸術的に表現したものであるという。先生の思想の骨格づくりにかかわるショーペンハウエルが、ここにも姿を見せるのである。しかも、先生が夜久野時代に、人生の糧として読み耽ったショーペンハウエルである。この台本には、先生の思想が息づいているともいえる。最終章である次の「解説」から先生の心を見つめたい。

『この世界は唯一の意志である。盲目的な恐ろしい、生きんとする意志である。そのどう猛なる意志が、生きんがために自ら闘い苦しみながら、客観化するのが、この世界の森羅万象である。人間の一生と人間の世界とは、この意志の最も高度に客観化した現象である。人生の一切の苦しみ、悩み、罪悪は、すべて、この生きんとする盲目的意



志の自己闘争に基因するもので、それは生きんとする意欲の続く限り、永遠に熄む時はない。天翔けるオランダ人の呪われた宿命は、生きんとする盲目の意志の最高度の客観化たる人間の悲惨な姿を表現するものであろう。

自然科学と音楽

先生は終生、アインシュタイン博士を尊敬し、その一挙手一投足をも見逃すまいとした。音楽についての先生の思いは、恩師とも仰ぐ博士が音楽の世界を愛したことによって、いっそう増幅されたようである。

昭和5年の早春、俊馬日記によると『留学中の大先生、鳥瀧先生を引っぱり出して音楽会へ』出掛けている。弟の千里の恩師である鳥瀧隆三・京都帝国大学医学部教授だと思われる。行った先はベルリンのポツダマー広場に近いベルンブルガー・ストラッセの大音楽館。公演されていた「シンフォニー オーケストラ」を聴くため。指揮者は、あのフルトベングラー。満員の人気であった。メンデルスゾーンのイタリアン・シンフォニーが奏でられた。『おっとりした美しい音楽は、日本にいる時から親しみ深いものであっただけに、この美しい音楽を聴きながら故国を夢みる気持ちにな』った先生。

先生の便り(昭5.3.10)に、音楽教育の大切さを説いたくだりがある。そのなかで、物理学者で音楽家は少なくない、アインシュタイン博士がヴァイオリニストとして、ステージに立つことができるほどの腕前なのだ、と述べている。また理論物理学の大立者のヴェルナー・ハイゼンベルクは若いとき、終日、ピアノを弾いて暮らし、ピアニストとしても専門家であることを紹介して次のように記している。『高尚な西洋音楽は、人間を高尚にし、また心を静めるもの。ことに理学者にとっては、非常に必要な心の糧である』『おれは自分で奏することはできないけれども音楽は必要欠くべからざるもののように感ずる。いつか伯林を去るとき、この美しい音楽に別れることに涙を流さね

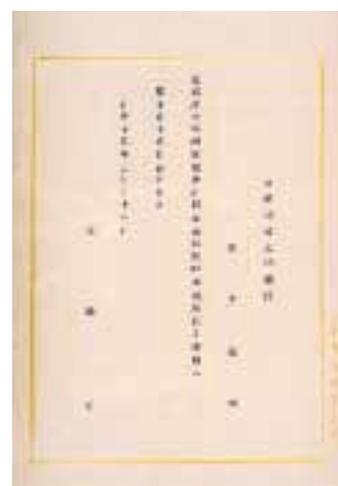
ばならぬであらう』

芸術と観察眼

先生の自然科学教育についての考え方は、いかにも天文学者らしい。天文学を志すものは、まず天空を見上げて、そこに光る星々をみつめるところから、学び始めることはいうまでもない。太陽が惜しみなく豊かな光を私たちに与え続け、夜になると月の光があるときは明るく地上を照らし、あるときは殆ど東山を闇のなかに溶かし込む。そうした体験や観測のなかから、さまざまな問題を抱いて、天文学者は育って行く。

宇宙についてのすべての疑問、あらゆる研究課題の出発点は、まず空を見上げるところに始まる。地球が丸いとか、太陽の周りを回っているとかいう宇宙についての知識を、子供たちに初めから与えてしまうことは自然科学教育にとっては、決して有益なことではない。『自然科学の研究は、経験と観察に始まる』と先生は言い切る。

先生の自然科学についての、こうした見解は、昭和18年度中等学校視察委員視察報告に最もよく表われている。先生は京都府、兵庫県、福井県の中学校、女学校の自然科学(数学物理、芸能科)の授業を見て回った。まず物象(事物現象)の授業において、教師たちが教科書に記されている理論を熱心に教えている点を取り上げて言う。『いろいろな現象について、それを科学的に理解するための知識を与えようとしているのであるが、これは教えることに重点をおく旧観念の教育である』と指摘している。先生の考え方によれば『まず、現象を十分に観察させなくてはいけない。それをもとにして、生徒たちに考察・推理の時間を与えなくてはいけない。どんな点に興味を持つのか。何が問題なのか。そうした生徒の研究能力と創意の力を引き出すことが大切で



第二次大戦末期、物象教員の養成所長として科学教育に尽力したときの辞令



ある。その観察、推理、考察を文章にする力をつけさせなくてはならない。また数学、物理、生物、工作、芸能科といった学科の枠をとりはずして、総合的な知識を引き出すように努めなくてはならない』と述べている。

知識の切り売り、は最も先生の嫌いな態度であった。独創力を養うことが教育の最大の眼目である。そういう考えは、かつて先生が学んだころの濟々曩の教育と重なっている。それはまた、京都産業大学の教学の理念として、いま本学に息づいているのである。

先生によると「観察する」ことが、自然科学の発祥であるから、これが最も重要である。単に眼でみるだけを指すのではない。すべての感覚をもって対象をみつめることである。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、筋肉感覚であり、いつも最高の能力を発揮できるように鍛練しなくては、十分に観察することにはならない。こうした鍛練において、芸術分野の学科が最も重要な役割を果たす。

たとえば図画(視覚) この授業によって空間における物体の位置、配列について正しく把握する力を得ることができる。また、ものの形や大きさを精密に捉えることができるようになる。明暗濃淡さらに色彩の微細な変化を識別できるようになる。

あるいは音楽(聴覚) 和音、単音、複合音の分析といった絶対音感を磨く。音の強弱、音色の律

動を識別する力を養い、時間の長短、遅速について定量的判定の力をつけて行くこと。そうした力を備えた生徒を養成して行くことが本来の目的であり、趣味や鑑賞を目的にしていると考えてはいけない。さらに嗅覚及び味覚においては気体、液体物質の種類を識別し、触覚においては硬軟、弾性、粘性や粗滑、乾湿、寒冷の識別などの力をつけなくてはならない。

芸術分野の意義についての先生の見解をみて行くと、先生が幼少のときから絵画の修得に努め、絵日記を描いたり雪舟ほか名人の筆致を克明に模写した時代のあったこと、あるいは音楽に強い興味を示してベルリン留学時代に本場のオペラ鑑賞に熱心であったこと、さらに無類の読書好きを基盤にして抜群の筆力を備えるに至っていること。そうした芸術方面の能力のすべてが、先生の自然科学にとって最も大切な力であったことに思い至る。

視察のあとの講評は厳しかったが、教員の質問には笑顔で懇切に答える先生であった。視察講評のなかで、数学物理の教員の少ない現状を嘆きつつ「物象教師の不足に関しては、学校長にして数学物理の専門家ある場合は、事務多く多忙といえども、自ら担当すべきである」と述べている。これまた後年、京都産業大学において先生が宇宙物理学担当に限らないで、数学やドイツ語、中国語の授業を自ら引き受け補講していた事実を想起させるのである。

3 天文学の第一人者

語学の天才

どんな国の言葉も、先生にかかれば、たちまち、わがものになる。昭和4年早春、文部省の在外研究員としてベルリン留学に向かう途中、先生は風光明媚なナポリにちょっと住んでみることにした。

下宿生活を始めて2週間経った3月9日、『イタリア語で大体しゃべることができるし、人の言

うことを大胆に聞き流すことができる』と、妻京子への手紙に打ち明けている。

「プロフェッソーレみたいに早くイタリア語の上達した人をこれまで見たことがない」とイタリア語の指導役を任じていた下宿の人たちが驚きの眼を見張る。

ローマのレピ・チビタという物理学者の本を読みながら、そうだ、ソルファターラーの火山を見



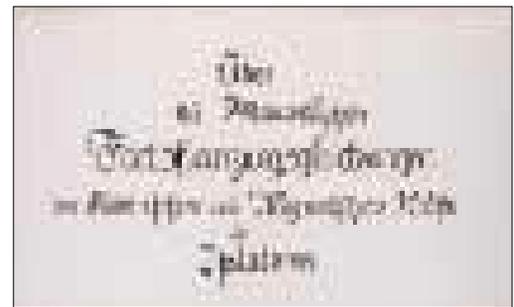
ナポリに魅せられた先生は火山をモチーフに多くの絵を残している

に行こうと思いつく。3月13日は快晴。ヴェスビオ火山の煙が遙かにカプリの島の上にたなびいている。空は碧、海は藍、陽はうらら。南イタリアの春はたけなわである。汽車で30分の郊外のポツォリオに着いて、ここから火山を見学に行く。いちど死ぬまでにはみておくこと。そういうナポリの絶景に囲まれて山道をぶらついていると、青少年が10人ばかりもやって来て、英語で話しかけてくる。イタリア語で答えると、歓声を上げて大喜び。「ナポリは気に入ったか」「日本もきれいか」「船で来たのか」と質問の矢が飛ぶのに、きちんと答えて行く。メモもみないでナポリの民謡を歌って喝采を浴びる。『こんどの外遊では、イタリア語だけは思わぬエキストラのもうけものだ。ナポリの滞在は、はなはだ有意義である』と京子への便りにある。

次はドイツ語。昭和4年4月、イタリアからドイツに着いた先生は聞き慣れないドイツ語にとまどい、大あわて。次の日から猛烈にドイツ語の勉強を開始したことが記されている。『ドイツ語の発音が、日本でやって来たのとは、全然違うので、かなわない』。それに、イタリア語の癖がついてしまって抜け切れないから、すぐにイタリア語が口から出て来てしまうことを嘆きながら、先生は別に落胆したわけではなかった。広島高等師

範学校時代に専修学校に通ってみっちり鍛え込んだ時代がある。京都帝国大学の学生、教官時代の勉強を通して、ドイツ語の論文は不自由なく読み書きできる。ただ問題は、日常生活に使うドイツ語の発音だけである。3週間経った。

『なかなか、自由にドイツ語を操れない』日々のなか、独会話学校の「ベルリッツ」に通いはじめた。ドイツ語に不慣れな各国人たちと一緒に学んだ。はじめのうち、教師が書取りの練習をしましよと言う。先生は「ボクは十分に書けるから話し言葉を教えてほしい」と頼んだが、とにかく書取りのテストということになった。教師のゆっくり話して行くドイツ文をさらさらと書き取って渡すと、教師は「こんなに早く、しかも間違いがまったくない」と目を丸くして、そのあとは再び、書取りをテストすることはなく、会話に絞って授業してくれるようになった。『語学の勉強だもの、初心者になったつもりでがんばるよ』と、妻京子宛ての手紙が残っている。『なにげなくドイツ語でこの国の人たちと話



得意のドイツ語は広島高師の夏休みに東京の専修学校に出掛けてみっちり鍛えた



している自分に気づく』ようになったとき、9月、ベルリン大学の新学期開始、研究生活がはじまった。

先生は中国語にも通じていた。熱中したのは昭和7(1932)年5月からその秋更けるまで。授業のある日は大学の研究室に出て、宇宙物理学の講義の合間に時間をつくる。『午前11時 - 正午、中国語』、授業のない日は『夜、中国語』。専門の研究で疲れた頭を休めるかたちで、語学に打ち込んだ。5月から9月まで、中国語の本を座右に置いて離さなかった。前年の昭和6(1931)年はロシア語であった。『夜、露土亜語再勉強を始む(ただし毎夜、1-2時間ずつ、1カ月は継続)』と日記にある。ロシア語の論文を読む必要があって、1カ月間で、かつてのロシア語の力を取り戻そうとしたのである。

時計の針

天文学者は、宇宙をみつめる哲学者である。先生は日本の天文学界の巨星であり、時間と空間について、自然科学者として哲学者として、空を仰いでその本質を究めようとした。先生の執筆した随想集の記述から、先生の考えを追ってみよう。

天文台のほの暗い地下室である。そこに標準時計がある。先生が針の動きをみている。朧月のような白銀の面上に、黒く冷たい鋼鉄の針が、カチカチと正確に、1秒ずつの間隔を刻んで動いて行く。そこには、ただ時間だけが独走して、ほかの一切の存在はないかのようなようである。人間の逃れ難い運命を、決して自由に委せないぞ、と冷酷に監視しているかのような『時の眼』。天文台に上って、

晴れ渡った夜の空を仰いでみる。無数の星が宇宙の眩野に咲く可憐な花のように輝いている。

虚空の彼方、どこまでもどこまでも幽かに星は輝く。肉眼に見える星は五千か六千に過ぎないが、望遠鏡で見れば驚くほどに多い。しかも口径が大きくなるにつれて、星は急増する。だがこの星々は、いま輝いているにしても私たちの見ているのは、厳密には現在の星の姿ではない。冬の空に冴えた白光を放つ天狼星シリウスは、9光年の向こうにある。アメリカのパロマー天文台の大反射望遠鏡は、20億光年先の幽かな星雲を捉えたという。実に20億年前の太古の光を私たちは見ているのである。

「時」という神秘的なものが空間のなかを一步一步、歩いて行く。その時間には、幅というか、長さというか、何か一種の空間的な拡がりがあるかのような感覚を人にもたらず。空間的な長さと同じように、時間についても測ることができると考えてしまう。時間を連続として考える。「時」は、過去から未来へとつながっていると考えてしまう。

だが、「連続して存在している」と表現してもよいが、時は「存在している」わけではない。まだ来ていない時間は、まだどこにも「存在していない」のである。「存在している」のは、継続していない一瞬の現在である。カチカチという時計の針の音、針の歩みを私たちが見るとき、時が過去から未来へ移っているかのように思ってしまう。前後、左右、上下に拡がっていて目に見ることのできる空間と同じように、無限の過去から無限の未来まで連続する「何か」が存在しているように思う。しか



ローマの街角で(昭和4年)

し、空間では、行ってまた戻ることができるのに、時間については、過去に戻ることはできない。時は「存在している」のではなく「流れ」「移って行く」のである。

この空間と時間の関係は、分離できない。アインシュタインの相対性理論によると、同時刻とか同一場所といった判断は決して絶対的ではない。観測者の運動状態によって異なる。ある観測者が「異なった場所で同時刻に起こった」と判断したとしよう。しかし、それに対して相対運動するほかの観測者にとっては、同時刻でなくなる。あるいは「同じ場所で相次いで(現象が)起こった」とあ

る観測者が判断しても、ほかの観測者にとっては同一場所とは見えないことになる。

大宇宙の空間は「同時刻」という認識を拒む。大宇宙の遠い空間のなかに、悠久遼遠の過去の時間が織り込まれている。ひとが、遙かな彼方を見て行くほど、その空間はいよいよ遠い過去の時間をさかのぼる。観測にあたって「同時刻的空間」は、ありえないことは明らかであろう。日常生活においては、光の速度(秒速30万キロメートル)があまりに速いために、同時刻的空間を認識しているように思うのである。このように述べたあと先生は嘆息する。『げに、時間こそ不思議なれ』と。



イタリア語をやすやすとわがものにした先生は、旅先の景色を描いて京都の妻子に送った



半世紀経っても、その光景は変わっていない(昭和58年に雄豪教授、撮影)

4 科学する心

天文と物理

生涯をかけて研究に取り組んだ天文学について、物理学の領域との境目を先生は、どのように述べているであろうか。20世紀に入ると、天文学の研究は、その境界周辺で数学や物理学と混じり合う様相を呈した。物理学の研究を究めれば、天文学を理解できるように早合点する議論すら起きてくる。そこで先生は、まずこの点について『天文学は天体現象の研究について、数学や物理学の定理、法則を自由自在に使いこなしながら、天文学独得の研究を進める』と述べている。天文学は宏大無辺な宇宙空間の物質現象を扱うのであり、

同時に、悠久の時の流れにつれて宇宙の姿がどのように変遷して行くかを研究する学問であって、物理や数学、その他の自然科学とは共通する面もあるが、しかし際立った二つの特徴を持つものであると指摘した。

ひとつは、天文学の研究対象がすべて固有名詞で呼ばれる点である。例えば、化学者が水素を使って実験を始めるとしよう。日米どちらの国で研究するにしても、水素は普遍的な水素であり、共通の性格を備えている。しかし、天文学の研究対象の天体は、ひとつひとつ独立した存在である。つまり固有名詞のついた研究対象についての観測研究なのである。惑星の研究といっても、実態は



新城博士とともに中国へ日食観測に出掛けた(昭和11年)

火星の研究であり、木星、土星の研究である。恒星の研究といっても、なかみはシリウス、アルデバラン、ベテルゲウスであり、アンターレスの研究である。(Sirius: 大犬座の首星、天狼星ともいう。Aldebaran: 牡牛座の首星。Betelgeuse: オリオン座の首星。Antares: サソリ座の首星)

天文学では、それぞれの天体に関する個別的な研究が最も重要である。従って天文学上で発見された法則には、統計的なものが多い。むしろ天文学的法則は、統計的法則に限られるというべきであろうか。

もう一つの特徴は、古い昔の観測の価値が、現代に比べてどんなに精度が劣っていようと、どれほど時代を経ていたとしても、少しも減少しないことである。そればかりか、古い観測の数が少ないだけに、いっそう貴重なのである。これは自然科学のほかの分野にはみられない特徴であろう。例を挙げると「プトレマイオスのアルマゲスト星表に集録されたヒッパルコスの観測による恒星位置」と「近世の観測」の比較から、恒星の固有運動が発見された。あるいは「日月食について古代ギリシャ、中世アラビアおよび近世」の観測資料から、月の運動に関する精密な知識が得られ、それによって月の永年加速度が発見された。

つまり、天文学においては、どんなに小さな観測資料、あるいは同じような観測結果であろうとも「怠らず」「絶えず」続けて行かねばならない。数千年、数万年の弛まない観測の積み重ねによって、天文学の多くの謎が解き明かされて行くに違いないからである。時代を経るごとに、観測の重みが増す、というのは天文学の研究の特徴である。

『天文学に永く携わっていると、こうした独得の性格が、頭のなかにしみ込んでくる。言葉を換えると、天文学を研究する個人の性格の一部を形

成するようになってくる、とも言えよう』(『少しばかり天文学を語る 荒木俊馬』『天文月報』第47巻8号 昭29.8 日本天文学会発行)

独創への憧れ

わが国の教育の成果について独創的な研究が成し遂げられていない、という批判がある。先生は、これを『性急に結果をもとめる風潮による』と分析した。先生の持論によると、明治維新のあと、日本は欧米の物質文明を取り入れ、追いつけ追い越せと努力した。近代国家として列強のなかで、肩を並べて行くためには、工、医、農といった実用価値の高い、応用分野の研究に重点を置き、奨励した。

しかし、自然科学は、真理を探究しようという人類の精神の発露として生まれ発展した点に留意せねばならなかった。応用できるか、利用価値は大きいのか、といった目先の効用に気をとられてはいけない。科学教育にあたっては専門技術者の養成という目的だけであってはならない。そんな奨励の仕方であれば、偉大な発見発明は期待できない。天文学は、実用性という面から言えば、最もかけ離れた存在であり、真理探究の精神から生まれた純粋な研究であり、数学や物理化学の基礎知識を包含しているから『まことの科学教育の柱にすることが適切ではないか』と論じている。(『教養学科としての天文学』荒木俊馬。広島文理大編理科第16巻4・5号 昭24.9.10)

真理を愛する

夜久野に引き籠ったあとも、学問に対する謙虚で、周りからみれば事実と接するときの厳しい態度にいささかも変わりはない。「懇切丁寧なひと。田舎の一学徒の突然の質問に、あれほど詳



広漠とした原野のなかで観測器具を備え付ける観測班



休息。新城博士らしい顔がみえる(左から二人目奥)

しい回答をいただけるとは、思ってもみなかった。そう言って福井県在住の郷土史家、永江秀雄(福井県遠敷郡上中町の元教育委員長)は、懐かしむ。終戦から間もないとき、上中町立熊川小学校教諭であり、若狭地方の歴史や言語について研究生活を送っていた永江は、地元の講演会で、学識豊かという評判の高い講師の話の聴いていて、ハテナと思う。その講師は、日本民族の起源と世界史的な使命について、歴史学や言語学さらには物理学、天文学から検証してみせたのであった。

その講師の話の骨子は「日本の伝承神話は、戦争までは絶対のものとして尊重され、信奉されていたのに、終戦とともにいきなり非科学的なものとして葬り去られてしまった。しかし、すべてが非科学的なものではない」「天の岩戸の神話を考えよう。太陽系の遊星である金星は同じ遊星から分離生成したのであるが、この金星が飛び出して地球の近くを通過したため地球の自転が一時とまった。このとき地軸の方向も変化して...この地球の停止のことを神話は、天の岩戸隠れとした...」というのであった。

天文学にも興味を持ち解説書を読む永江は、荒木俊馬という天文学の世界的権威がいまは大学を離れて、それほど遠くない山村にいることを新聞報道で知っていた。きょうの講師の話は、天文学の常識と違うのではないか。疑問を抑え切れなくて、質問を長々と書いて俊馬先生に送った。高名な天文学者だから多忙を理由に返事をもらえないかも知れない。

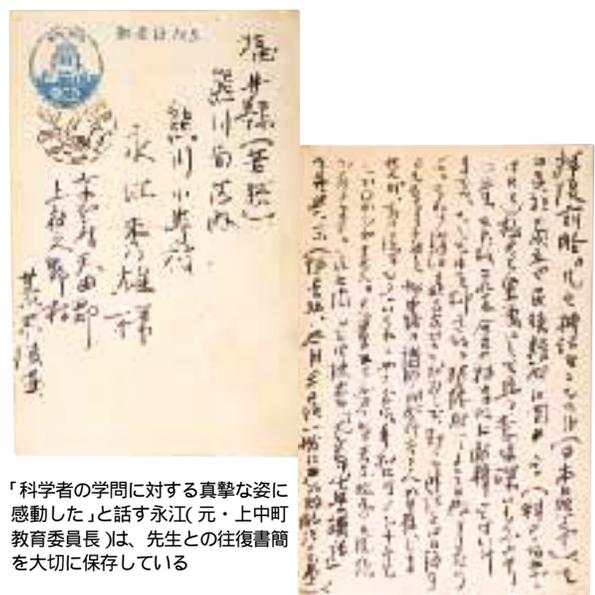
それを覚悟で投函したのであるが、20日後、分

厚い封書が届いた。永江は、その封書を、学問に対する学者の真摯さを示す宝物として、いまも大切に保存している。

『凡そ神話なるものは、その民族の成立や民族精神に関して、きわめて重要にして且つ意味深いものであります。これを今日の科学的に解釈してはなりません。科学的に根拠づけようと欲するならば、それはいわゆるひいきの引き倒しで、かえって神話を冒瀆するものとなりましょう。(中略)しかし、天の岩戸の話は、幾分か天文現象と関係があります』として、天の岩戸の物語が、日食にヒントを得て作られたという所説(荒木俊馬著『天文年代学講話』恒星社刊第1章に詳述)と、その論拠が記されていた。

また『お尋ねの件ですが...あまりにも科学的常識に外れているために、ことさらに否定すべき説を述べる必要がない、要するに真面目に考えるべき問題でない。金星が木星から分離生成したという問題。その可能性も蓋然性もゼロです。天体力学の一般法則からいって、あり得ないこと。また金星の作用によって地球の自転が止まった事実も考えられない。地球の回転が一時にしろ止まるといことは天体力学の上で、あり得ない。この返事の内容について、詳しく理解するためには、天体力学の理論を一通り習得して、解析数学的な予備知識を持つこと、地球物理学の全般的な研究をなさる必要があります』として、研究に取り組む方法について懇切に述べられていた。

その講師の言うように、神話について、背後にある日本民族の歴史を重ねてみるべきではある



「科学者の学問に対する真摯な姿に感動した」と話す永江(元・上中町教育委員長)は、先生との往復書簡を大切に保存している

う。その限りで、結論だけを比べれば俊馬先生の回答と、問題の講師の話とは似てはいた。だが、科学する心という点で、まったく異なるものであった。「私は荒木博士との手紙のやりとりを通して、真実を学ぼうとする強い欲求を抱いた。その欲求が生涯を貫くものになった』『最も科学的であるということは、科学の限界を知ることです』という博士の回答の言葉は、尊厳なものとして大切にしている」と、ついに逢う機会のなかった俊馬先生に尽きない尊敬の心を語るののである。

コペルニクス

経済学に対して、先生は強い関心を若いころから抱いていたことは間違いない。夜久野に別れを告げた先生は、京都市の大谷大学に職を得て一般教育課程で自然科学を9年間、担当した。昭和34年9月、大谷大学図書館に先生は一般的参考書として42冊を寄贈している。専門分野の図書を除いての寄贈であるから天文学、物理学、数学あるいは哲学に関する書物名はここには記されていないが、それにしても図書のうちで経済関係の書物が最も多いことが目を引く。それらの本の題名をみると、先生が昭和初年から長期間にわたって、世界経済の事情を見据えていた姿がわかってくる。

では先生は、経済学について、どのような見方をしていたのであろうか。先生は昭和48(1973)年、ポーランド科学アカデミーの招待でトルン市で開かれた国際学術会議に出席した。国家行事として開いたコペルニクス Nicolaus Copernicus 生誕500年行事の一環であり、学術会議のなかのシンポジウム「人類と宇宙」で記念講演するためであった。

9月10日、先生のドイツ語の講演は、同時通訳で同国内全域に放送され、翌日は二大紙「ワルシャワ生活」「人民新報」で、ともに詳細に報道された。先生の講演と、コペルニクスについての研究内容は『京都産業大学論集』第3巻第4号 自然科学系列第3号コペルニクス生誕500年記念特輯(昭49.3)に収録されている。

その「コペルニクスの研究歴と業績(荒木俊馬)」によると、「人間の魂の両翼は力学と絵画である(レオナルド・ダ・ヴィンチ)」という言葉のあとに「科学の両翼は天文学と経済学である」というコペルニクスの言葉が引用されている。世界的な天文学者であった俊馬先生が、京都産業大学の創設にあたって、理学部と経済学部の2学部だけで発足させた事実と重ね合わせると興味深いものがある。

天文学と経済学を科学の両翼とするコペルニク

スは、この両翼のおかげで真実を求め人生をより完全なものにすることができると述べたと伝えられている。先生もまたコペルニクスに似て、認識の問題において自然科学と哲学に関心を抱き、人生の解決への道をもとめて経済学に関心を示した。先生は『コペルニクスは、経済学の分野でまぎれもなく当時第一流の専門家であった。驚異に値する進歩的な多くの新理念を導入した。あるものは時代に先行したので当時の人たちが理解できなかった』と評価している。

その一例として、プロシャ貨幣制度の改善策を練り上げたとき「悪質貨幣の法則」を明らかにしていたという。貨幣鑄造について、金または銀の含有率が時と共にしだいに下がって悪質な貨幣が市場に出回って行ったとき、含有量の少ない貨幣が生き残って、含有量の多い良質の貨幣は消えて行く(つまり鑄つぶして含有量の少ない貨幣に生まれ変わってしまうか、死蔵される)という見解である。当時としては大変な卓見であった。イギリスの経済学者トーマス・グレシャムが「悪貨が良貨を駆逐する」と言い、グレシャムの法則として今日に至っても知られているが、コペルニクスはすでにその半世紀も前に、この法則を的確に把握していたのである。

先生は、天文学者として新進気鋭の時代からコペルニクスの信奉者であり研究者であったようである。大正から昭和にかけての俊馬日記のなかに、経済についての研究論文を熱心に読んでいた時期があり、まさに科学の両翼として、経済学に関心を持っていたと思われる。

記念講演

『コペルニクスは1543年、著述「天体の軌道運動について」で、地球と太陽の関係について太陽の周りを地球が回っていると述べた。地球を中心に置いて、太陽を含む天球が回っているとした古くからの宇宙観を覆した。太陽と天球を停止し、地球を動かしたのであり「人類の思想史における画期的転向点」を実現したという意味で、まさにコペルニクスの転換そのものであった。この見解は当時の体制派によって厳しい迫害の対象になったのであるが、それでも地球は動いているのだから、という信念を持つ科学者たちによって、実は動かすことのできない真理であることがしだいに理解されて、近代自然科学の飛躍的な進展につながって行った。

私たちの地球を含む銀河系宇宙のなかに、地球人類のような高等生物は他にも存在するのか、し

ないのか。そうした疑問も当然、起こるであろう。たとえば地球から最も近い天体にその可能性を求めるとすれば、バーナード星の伴星である。その星は地球と似た環境のなかにあり、偶然が重なれば高等生物の存在する可能性がないではなからう。しかし、そこは、時速4,000キロの宇宙船で向かったとしても到着までに16万年かかるのである。地球を使い棄てにして、ほかの天体に移り住む可能性は絶無である。人類の住み家は、この地球以外にない。私たち人類は一致団結して、この地球を守り、地球住民のために清潔な環境としての地球をつくりあげることが、いまの世代あるいは将来の世代のために最も重要な全人類にとっての課題であろう。

私(荒木先生)は人類の未来については悲観的である。人口の自然増はとどまるところを知らないであろう。陸はコンクリートの砂漠になって行くであろう。ゴミは陸地を覆い、海洋を埋めて行く。大気汚染は深刻になる。人口が増えて食糧危機がやって来るし、食糧づくりの農薬などによって、病気が増える。一斉に襲いかかって来る難問に対して、人類の力は決して強くない。台風や地震の予知が将来において正確になったとしても、台風を封じ込め、地震をとどめる術を持つことはないのである。

大自然は地球上に生命を有するあらゆる動植物

にとって共有財産であり、全生物の共存共栄を図るという視点に立って、死にものぐるいで努力して初めて地球の調和が保たれるであろう。地球上に美しい自然を再びよみがえらせようではないか』

好奇心

学者が専門領域の事柄について研究し、周辺の資料に関心を抱くのは当然である。しかし偉大な発見や独創的な発明のヒントは、どこにあるのか予測がつかない。世界水準の研究者は、専門領域を離れて、幅広い事柄に興味深く接するものである。そこで得られた新しい知見が専門領域をより深く掘り下げて行くときに、意外な力を発揮することがある。

あるいは、そうした目的意識からの発想とは関係なく、一流の学者には、あらゆる分野に熟っぽい好奇の眼差しを向ける性癖の持ち主が多いとも言える。俊馬先生もまた、旺盛な好奇心に満ちた生涯を送った。

昭和9年1月、南洋諸島へ日食観測隊がわが国から派遣された。京都帝国大学の荒木俊馬、上田穰の両教官のほか、海軍技術研究所、逓信省、東京天文台、東京帝大...メンバーは当時一流の天文、宇宙物理学者であった。新聞社の報道記者も同船して、東京湾を出たあたりで、原稿を抱いた伝書鳩6、7羽が群れになって帰って行った。赤い



列強による植民地づくりが進められた昭和初年、わが国の統治していたローソップ島へ大掛かりな日食観測隊が派遣された。その壮行会(先生は前列中央)

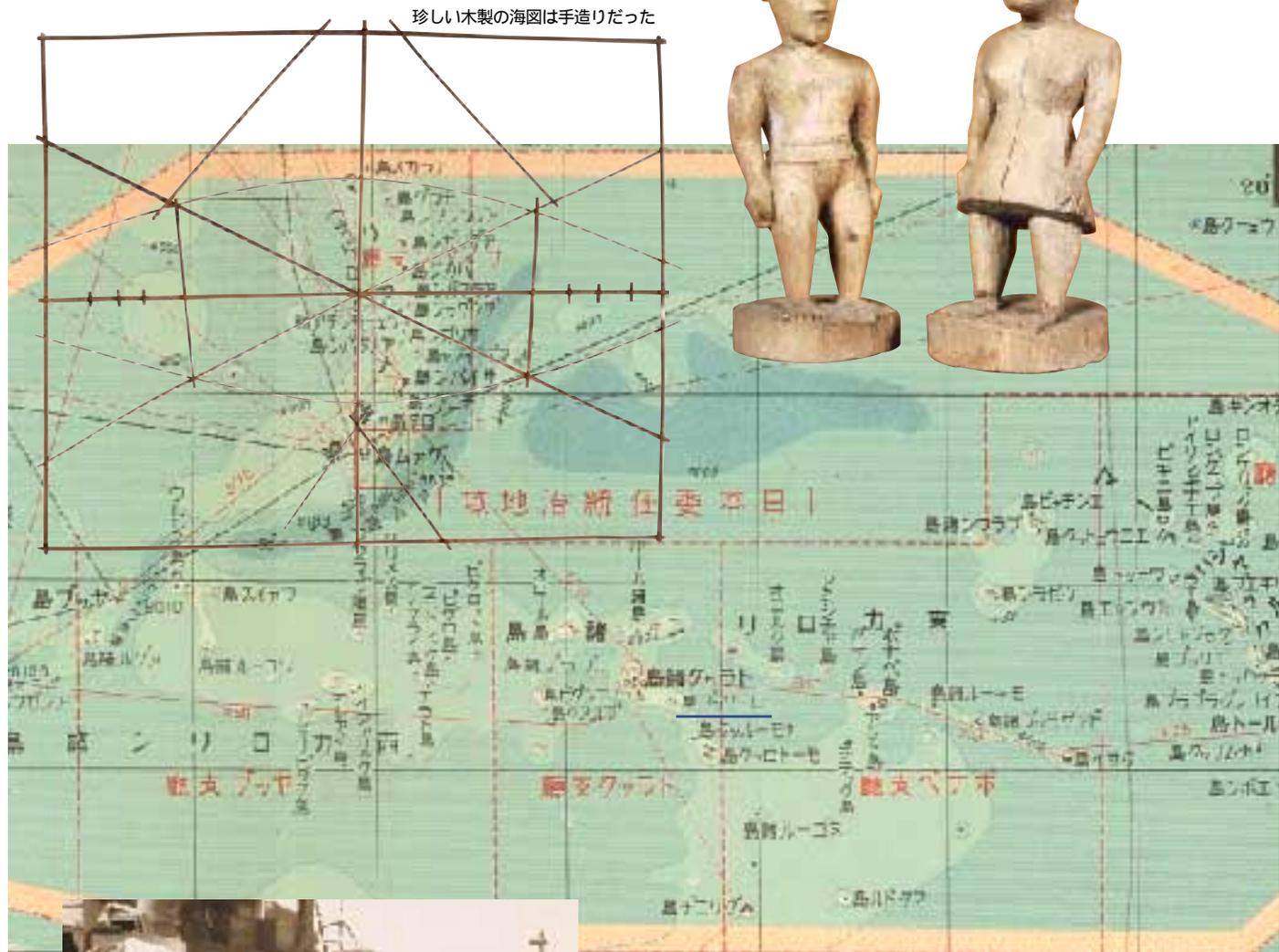
血色の三日月が水平線に沈んで行き、夜が来る。
『星美し。オリオン星座高し』。俊馬日記は、雲と
高波の景色のなかに、空の様子を的確に描写して
いる。

月影の漸く満つる頃ほひに
椰子の木蔭に 酒汲まむ我は
さやかなる椰子の林に
月と我と影のトリオは 酒に酔ひなむ

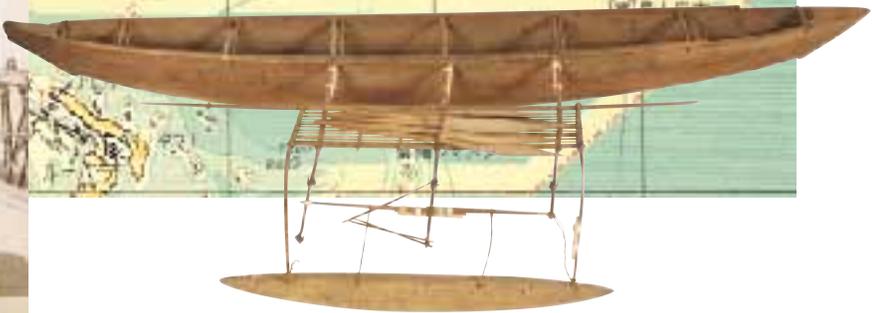


先生が持ち帰った民俗
資料の数々と当時のロ
ーソップ島を含む地図

といった三十一文字をよみながらトラック諸島の
環礁を遙かに見る海上に到着。夜、ローソップ環



軍艦「春日」の甲板での記念撮影(先生は前列右から2人目)



民芸品の丸木舟

礁の近くで漂泊。翌日、島入り。先生の目には、このローソップ島の生活のすべてが『このうえなく面白い』ものに映った。島民の身分階級から言語、文字、家族制度、あるいは衣類、家屋、食物、さらに教育制度と学校など好奇心の対象は広がって尽きるところがない。俊馬日誌の記述は、民俗学の論文としても資料価値の高いことを思わせる内容である。まず服装。粗末な下着をつけて裸足、日本でいう労働者風だが、なかには白麻の洋服に帽子をかぶって白くつをはいている男性もいる。女の人は、簡素な夏服に裸足。椰子の葉でつくった腰ミノ、それも赤く染めたものを着けている男をみて、目を白黒させる先生。

日食観測の準備作業を一所懸命に手伝ってくれた島民に、衣服が渡された。その翌日、他の島民がその服を着て歩いている。どうも所有欲というようなものは、まだ芽生えていないのだな、と気づく。見回っていて、異様な耳に驚く。男も女も、年を取った島民のほとんどが、耳たぶに穴を開けて引っ張って長く伸ばし、くると巻いて耳にかけて飾りのようにしているではないか。文身も、^{いれずみ}年寄りに多いが、これは若い人たちにも散見される。

働いている島民たちが、互いに呼び合っているのを聞くと、どうも「姓」を持っていない。この島

に伝導に入っているRobert 師は、ルーベルトと呼ばれているが、島民にはクリスチャンネームが与えられているらしい。近くの島々では、男には金太郎、清正、義経、ピスマルク、女の子にはおしまいに「子」をつけている。

教育者として学校の様子が気にかかる先生。ルーベルト師の話の聞いたり学校を見学したりして、一所懸命に実像を探り出そうとする。7歳で教育開始。12歳になると、大きな島に設置されている公学校を受験する。ローソップ島では毎年、30人ぐらいが受験年齢を迎える。ルーベルト師が身体強健で風土病にかかっていない成績優秀な人材を選んで受験させている。未受験組については『算術(加減乗除及び初等分数) 読方、書方(初等者には片仮名。その後、平仮名) 唱歌(島民歌にして、音符を使用するも、楽器を使用せず) 聖書とを毎日授業し、女子については家事裁縫』をも教えていると記している。

修行年限2年の木工徒弟養成所が近くの島にあって、技術教育が行われていること、現地日本人や混血児の教育事情、島民の職業、青年団の活動、島民の衛生状態、さらには食糧事情について、それぞれに綿密に調査したうえでの記述がある。

『ほうかね、それからどうなるのかね』。ベルリン時代から愛用のパイプを手にしながら、南洋の島の生活に、好奇の目を向け聞き取り調査にあたった先生の姿がある。

ふ、そう 扶桑会

教育は国づくりの礎である。どんな国をつくり出そうとしているのか。社会が動き、国民の考えが移って行けば、理想の国づくりという目標もまた、揺れる。理想の教育像は、時の流れにつれて、漂うかのようなものである。教育の重心は、右からみれば、左へずれているとの批判が出る。左からみれば右に傾く印象があろう。教育に対する見方は、みる者の視座によって長所短所の両面のどちらかに偏向しているように思われるであろう。まことに教育は、社会を投影し、国の姿を映す鏡である。

ひとつの見解によれば、戦後のわが国の教育については、知育に傾いて心を育てなかつた欠陥がいま、露呈されているという。日本の歴史と伝統を踏まえた心を大切にする教育が望ましいと考える。荒木俊馬先生は、まさにそのような教育観を持っていた。日本という国を大切にする若者を育てる。そのために大学はどんなカリキュラムを組むべきか。京都産業大学(京都) 皇学館大学(三重) 金沢工業大学(石川)の教学のトップが、同



観測隊員による記念の寄せ書きは、木製のお椀(ラグビーボールぐらいの大きさ)の内側に記されていた

じ目的をもって昭和53(1978)年、「扶桑会」を結成した。扶桑は「陽出づる処にある神木」であり、わが国の別称でもある。日本の国に連綿と伝わる歴史と伝統を継ぎ尊ぶという点で、建学の精神の似通っている大学であった。先生の考えは、はじめ三本の木で始まったとしても、やがて共鳴者がふえて、立派な人材が育成されて行き、日本列島の各地を覆う神木の樹林に成長することを夢みて熱心に取り組もうとした。

昭和53(1978)年元旦は、日曜日に重なり穏やかに曇り空で明けた。6時半起床。子供たちはすでに成長し、それぞれに家庭に落着いて吉田中大路1の自宅は妻京子とふたりきりである。雑煮でゆったりと新年を祝っていると、午前10時、京都産大の馬術部員が4頭の馬に乗って恒例の年賀に訪れた。若者の元気いっばいの声が吉田山の麓に響いた。笑顔の荒木先生だが、これが最後の正月になるうとは、先生も京子も、訪れた馬術部員たちも夢にも知るはずがなかった。

この年の荒木先生は京都産業大学理事長でもある教え子の磯村^{ひでお}唯夫を扶桑会に伴った。気心の知れた教え子との旅は心の休まるものであったに違いない。他大学からも理事長が参加していたので、先生にとっても磯村同伴の理由があった。

2月4日 近鉄特急で宇治山田へ。伊勢内宮に詣ったあと皇学館大学で会合 4月22日 上賀茂の「菖蒲園」で3大学打合せ会 5月31日、

6月1日 高速北陸自動車道で金沢工大の創立記念及び大学院開設式典に出席。あわせて3大学打合せ会。

そして7月8日(土)、快晴の山中温泉に泊まり溪谷歩きを磯村とともに楽しみ午後、金沢工大での扶桑会。夜は金沢駅前の都ホテルに泊まった先生は、懇談会のあと、ホテルのバーで磯村と夜9時半まで杯を傾けた。「酒仙」の先生と、磯村との最後の酒宴であった。翌々日、突然の死が先生を襲ったのである。

『本学創設者 荒木俊馬総長の急逝』として、昭和53年9月25日の京都産業大学報は、次のように悲しみを報じた。「総長は、その日(7月10日)午前中は、いつものとおり来学され、総長室で自分の書物を校正されたり、また昼食時には、隣りの常務理事室で柏祐賢副総長ほか大学理事とともに食事をとりながら、楽しく歓談されていた。その後、午後1時半過ぎ、元気で帰宅された。しかし、同日夕方に、ご自宅で急性心不全を起こされ、午後7時、やすらかな永遠の眠りにつかれた。」

大学葬は7月22日、若いころの俊馬先生が妻子とともによく散策した、先生ゆかりの相国寺(京都市上京区今出川烏丸東入ル)に、知人をはじめ、京都産業大学の教職員、学生、同窓生およそ3,000人が参列して執り行われた。法名は大功院偉哉俊馬居士。お墓は相国寺の塔頭、大光明寺に、次弟の千里博士と寄り添っている。



わが同志である京都産業大学生らにおくられて先生は逝った(京都の相国寺)

後年の大学者、勢ぞろいの留学生名簿 俊馬先生の古い日記帳や書き損じの原稿類に挟まってセピア色の名簿が最近、みつかった。『文部省在外研究員表』(文部省専門学務局 昭和5年3月発行 48頁)で、派遣中の学者の一覧表。明治8年に始まった派遣学者について、氏名、所属、専攻、派遣年度、男女別人数の統計も記されている。初年度は11人だが、昭和4年度361人(うち女性3人)に膨らんだ。留学先はドイツが最多の131人、ついでイギリス、フランス、アメリカの順。

大変な顔触れである。京都帝大からは荒木俊馬、長谷川萬吉の両助教授のほかに、蟻川虎三(統計学。京都府知事)、木原均(遺伝学。文化勲章)が掲載されている。東京帝大の末綱恕一(数学)、菊井維大(民事訴訟法)、平泉澄(国史)、宮沢俊義(公法、文化功労者)、北海道帝大の茅誠司(物理学。東大大学長。文化勲章)

東京文理大の福原麟太郎(英文学。文化功労者)、新潟医大の平沢興(解剖学。京大総長)

一高の相良守峯(独文学)、三高の伊吹武彦(仏文学)ら、わが国の学問の先達たちの名前を見いだす。文部省の派遣留学生は、国威発揚の人材育成の目的で将来の各分野のリーダーとして選ばれた。留学した学者たちもまた、その期待に十分にこたえたということができよう。



留学中に訪れたハイデルベルグ城の巨大な酒蔵